

アルメニア語・ゴート語における条件文の統辞法

千種 眞一

キーワード：条件節、帰結節、接続法、希求法、非明示的条件

1. はじめに

条件文は、構造的には、条件節もしくは前提節(protasis, “IF” 節)と帰結節(apodosis, “THEN” 節)という2つの部分からなると定義される。

意味的な観点からは、構文全体の意味すなわち条件節と帰結節との関係が問題となる。条件節が原因(cause)を示し、帰結節が結果(effect)を述べるという暗黙の仮定がしばしばなされるが、これだけが両節の取り得る関係ではない。本質的には3つの基本的な関係が存在する。すなわち原因・結果、証拠・推論(evidence-inference)、そして等価(equivalence)である。以下ではギリシア語原文を提示し、翻訳が利用可能であれば、アルメニア語訳(Arm) およびゴート語訳(Goth)を掲げる：

(a)原因・結果は「…だから…だ」と言い換えることができるような関係である。例えば、Ro 8,13 εἰ κατὰ σάρκα ζήτε, μέλλετε ἀποθνήσκειν 「もしもあなた方が肉に従って生きるなら、あなた方は確実に死ぬであろう」(肉に従って生きるのだから確実に死ぬ) = Arm: et'ē əst marmnoy kec'ək', meřaneloc' ek'; 1Cor 2,8 εἰ ἔγνωσαν, οὐκ ἄν τὸν κύριον τῆς δόξης ἐσταύρωσαν 「もしも彼らが〔それを〕知っていたなら、栄光の主を十字架につけたりはしなかったであろう」(知らなかったから十字架につけられた) = Arm: et'ē ēr canowc'eal, oč' ardewk' zTR p'ařac'n i hač' hanēin ;

(b)条件節が帰結節に対して取り得る第2の関係は、根拠または証拠の推論に対する関係である。話し手は何らかの証拠から何かを推論する。つまり、話し手は、一片の証拠が彼に示唆する含意について帰納推量を行うのである(例えば、「彼女が左手に指輪をはめているなら、彼女は結婚している」)。条件節は帰結節の原因なのではなく、その逆である。すなわち「彼女が結婚しているなら、左手に指輪をはめているだろう」。このように、しばしば根拠・推論条件は意味的には原因・結果条件の裏返しとなることがある。例えば、Ro 8,17 εἰ δὲ τέκνα, καὶ κληρονόμοι 「もしも〔私たちが〕子供たちだとするならば、〔私たちは〕相続人でもある」 = Arm: et'ē ordik', apa ew žařangk'; 1Cor 15,44 εἰ ἔστιν σῶμα ψυχικόν, ἔστιν καὶ πνευματικόν 「もし自然的な体があるのなら、霊的な体もまたあるのだ」 = Arm: et'ē goy marmin šnč'awor, goy ew hogewor ;

(c) 等価とは、「もしAならばBである」は「A=B」を意味するものと定式化でき

る関係をいう。例えば、Ga 2,18 εἰ γὰρ ἄ κατέλυσα ταῦτα πάλιν οἰκοδομῶ, παραβάτην ἑμαυτὸν συνιστάνω「なぜならば、もしも私が自分で破壊した当のものを再び建てるとするなら、私は私自身が背反者であることを証明することになるからだ」= Arm: zi et'ē zor k'akec'in, znoyn miwsangam šinic'em, apa yanc'awor zanjn im es injēn erewec'owc'anem = Goth: unte jabai þatei gatar, þata aftra timrja, missataujandan mik silban ustaiknja; Jas 2,11 εἰ δὲ οὐ μοιχεύεις φονεύεις δέ, γέγονας παραβάτης νόμου「もしもあなたは姦淫していなくても人を殺しているならば、律法の違反者となっているのである」= Arm: et'ē spananic'es oç' bayc' šnayc'es, efer yanc'awor ōrinac'n.

こうした意味的論理的関係は言語を問わず、本稿の対象である新約聖書ギリシア語、古典アルメニア語、ゴート語にも共通して観察されるものであり、そのための言語的手段は条件節と帰結節という形で各言語に用意されている。しかし、実際にはこうした基本的な論理的関係のレベルにおいてさえうまく適合しない例は多数あり、これらのどれかに無理に押し込める必要もない。積義的な観点からも、条件節と帰結節の関係は文脈に応じて柔軟に判断されるべきであろう。それゆえに本稿では、こうした論理的関係の分析をするのではなく、むしろ形式的な側面から条件節および帰結節の構造、特に叙法の分布に焦点を当てて、アルメニア語とゴート語のそれぞれに固有と見られる統辞法的特徴の析出を試みる。

2. ギリシア語における明示的な条件文

条件の概念を伝える方法としては、明示的な（すなわち形式的構造的標識を伴う）方法と非明示的な（すなわち形式的構造的標識を伴わない）方法がある。明示的な条件は条件節に「…ならば」を意味する接続詞を用いて表現される。ギリシア語には 2 種類の接続詞 εἰ と εἰάν があり、以下に記すように用法は異なっている。アルメニア語では et'e (t'e, et'ē)のみ、ゴート語では jabai（1 度だけ前倚辞的な -ba が Jn 11,25 に見られる）と nibai/niba が用いられる⁽¹⁾。

2.1. 条件文の構造的範疇

新約聖書ギリシア語では、明示的な条件文は以下に示されるような 4 つの構造的な型によって標示され、各型は第 1 類、第 2 類、第 3 類、第 4 類と呼ばれている。

	条件節	帰結節
第 1 類	εἰ + 直説法 任意の時制 (否定辞 : οὐ)	任意の叙法 任意の時制
第 2 類	εἰ + 直説法	(ἄν) + 直説法

	過去時制： アオリスト 未完了過去 (否定辞：μή)	過去時制： アオリスト (過去時) 未完了過去 (現在時)
第 3 類	ἐάν + 接続法 任意の時制 (否定辞：μή)	任意の叙法 任意の時制
第 4 類	εἰ + 希求法 現在またはアオリスト	ἄν + 希求法 現在またはアオリスト

これらの類はそれぞれ以下に述べるような意味的範疇に対応している。ギリシア語における叙法は命令法のほかに直説法（または叙実法；indicative mood）・接続法（または叙想法；subjunctive mood）・希求法（optative mood）が区別されるが、アルメニア語では直説法と接続法、ゴート語では直説法と希求法の区別しか存在しないために、概してギリシア語の希求法にはアルメニア語接続法・ゴート語希求法、ギリシア語接続法にはアルメニア語接続法・ゴート語希求法もしくはアルメニア語直説法・ゴート語直説法が対応している、条件文の条件節・帰結節における叙法の分布にも、原則的には、このような対応が反映していると予測される。

帰結節における叙法の選択は、基本的には条件節の叙法に依存しないとされるが、ギリシア語に関しては、第 1 類と第 3 類で任意の叙法（つまり直説法・接続法・希求法・命令法）が選択されるのに対し、第 2 類では直説法のみ、そして第 4 類では希求法のみというように、条件節と帰結節の間で叙法の選択に制限が認められる。

ギリシア語の第 1 類、第 2 類、第 3 類のそれぞれには概ねアルメニア語 et'e 条件節の次のような構造が対応している：(1) et'e+直説法（ただし未来の機能で接続法現在・アオリストも）、帰結節には直説法・接続法（未来の機能で）・命令法；(2) et'e+直説法（未完了過去）、帰結節にも同じく直説法（未完了過去）；(3) et'e+接続法、帰結節に直説法・接続法・命令法（千種 2001: 241）。

ゴート語 jabai 条件節における叙法の分布は概ね (1)jabai+直説法（現在・過去）= εἰ+直説法（現在・アオリスト）または ἐάν+接続法（現在・アオリスト）、(2)jabai+希求法過去=εἰ+直説法未完了過去、(3)jabai+希求法（現在）=εἰ+直説法（現在）または ἐάν+接続法（アオリスト）であるが、これらのうち(2)と(3)で叙法間の原則的な対応からの逸脱が見られる。帰結節は原則として、事実と仮定される条件節にはそのように仮定される帰結節が、事実と仮定される条件節にはそのように仮定される帰結節が対応しており（すなわち希求法過去）、可能性を表す条件節に対する帰結節の叙法の選択には強い揺れが見られるとされる（Streitberg 1981: 90）。ゴート語

の希求法は願望と可能性を表す印欧語の希求法に遡るが、接続法（と命令法）の機能も部分的に受け継いでいるからである。

2.2. 条件文の意味的範疇

2.2.1. 第1類条件

これは、議論のために真または事実であると仮定される条件関係を表し、時に単純条件とも呼ばれて、新約聖書ではもっとも広く用いられているタイプである⁽²⁾。アルメニア語ではこのタイプの条件節に対して直説法、帰結節には直説法・接続法・命令法が用いられ、ゴート語では条件節に直説法、帰結節には直説法、散発的に希求法が用いられる。以下は Gk : 直説法 = Arm : 直説法 = Goth : 直説法の対応例である。

a) 現在と共に :

Mt 12,27-28 εἰ ἐγὼ ἐν Βεελζεβοῦλ ἐκβάλλω τὰ δαιμόνια, οἱ υἱοὶ ὑμῶν ἐν τίνι ἐκβάλλουσιν; … (28) εἰ δὲ ἐν πνεύματι θεοῦ ἐγὼ ἐκβάλλω τὰ δαιμόνια, ἄρα ἔφθασεν ἐφ’ ὑμᾶς ἡ βασιλεία τοῦ θεοῦ 「私がベエルゼブルによって悪霊どもを追い出しているのなら、お前たちの息子たちは何によって〔悪霊どもを〕追い出しているのか。… (28)しかし、もし私が神の霊によって悪霊どもを追い出しているのなら、神の王国はお前たちの上にまさに到来したのだ」

Arm: et’*e* es Beelzebowlaw hanem zdews, ordik’*n* jer iw? hanic’*en* … (28) apa et’*e* hogwov AY hanem es zdews, owremn haseal ē i veray jer ark’ayowt’*iwn* AY

Mt 17,4 εἰ θέλεις, ποιήσω ὧδε τρεῖς σκηνάς 「もしあなたがお望みなら、私はここに3つの幕屋を造ろう」

Arm: et’*e* kamis, arasc’*owk’* eris taławars

Lk 6,32 εἰ ἀγαπᾶτε τοὺς ἀγαπῶντας ὑμᾶς, ποία ὑμῖν χάρις ἐστίν; 「もしあなたたちを愛してくれる者たちを愛したとしても、あなたたちにはどのような恵みがあるのか」

Arm: et’*e* sirēk’ dowk’ zsiirelis jer, zinč’ šnorh ē jer

Goth: jabai frijod þans frijondans izwis, hva izwis laune ist?

Mt 26,39 εἰ δυνατόν ἐστίν, παρελθάτω ἀπ’ ἐμοῦ τὸ ποτήριον τοῦτο 「もしできることなら、この杯が私から去って行くように」

Arm: et’*e* hnar ē, anc’*c’ē* bažaks ays yinēn

Ro 7,16 εἰ δὲ ὁ οὐ θέλω τοῦτο ποιῶ, σύμφημι τῷ νόμῳ ὅτι καλός 「もしも私が自分の欲していないことを行っているとするならば、律法が良いものであることを認めていることになる」

Arm: et’*ē* zor oč’*n* kamim zayn aṙnem, vkayem ōrinac’*n* t’*ē* barwok’*en*

Goth: jabai þatei ni wiljau þata tauja, gaqiss im witoda þatei gob

1Th 4,14 εἰ γὰρ πιστεύομεν ὅτι Ἰησοῦς ἀπέθανεν καὶ ἀνέστη, οὕτως καὶ ὁ θεὸς

τοὺς κοιμηθέντας διὰ τοῦ Ἰησοῦ ἄξει σὺν αὐτῷ 「もしも私たちが、イエスは死んで甦ったと信じているのなら、そのようにまさに神はイエスをとおして、眠った者たちを彼と共に導き出してくれるであろうから」

Arm: et'ē hawatamk' et'ē YS meřaw ew yareaw, noynpes ew AC znnjec'ealsn i jeřn YSi acc'ē ənd nma

Goth: unte jabai galaubjam þatei Iesus gaswalt jah usstop, swa jah guþ þans þaiei anasaislepun þairh Iesu tiuhaiþ miþ imma

次の箇所は上記 Mt 26,39 と連関しているが、アルメニア語 E 写本では接続法が現れている。これは、ei = et'e 条件節にさらにその下位条件として ἐάν = apa t'e 条件節が挿入されているために、条件関係が重層的な構造をなしており、その下位条件にまず対応する帰結節として、事実ではなくむしろ可能性を表示する必要を認めたからだと考えられる：

Mt 26,42 εἰ οὐ δύναται τοῦτο παρελθεῖν ἐάν μὴ αὐτὸ πῖω, γενηθήτω τὸ θέλημά σου 「もし私がこれを飲まない限り、それが去って行くことはありえないのであれば、あなたの意志が成るように」

Arm: et'e hnar ic'ē (M: ē) anc'anel yinēn bažakis aysmik, apa t'e oč' arabic' zsa, elic'in kamk' k'o

b) 過去と共に：

Lk 19,8 εἰ τινός τι ἐσυκοφάντησα ἀποδίδωμι τετραπλοῦν 「もし私が誰かからゆすり取ったことがあるなら、4倍にして返す」

Arm: et'e zok' zrkeci (M: zrkeci'ic' [conj. aor]), hatowc'ic' č'orek'kin

Goth: jabai hvis hva afholoda, fidurfalþ fragilda

Jn 18,23 εἰ κακῶς ἐλάλησα, μαρτύρησον περὶ τοῦ κακοῦ 「私がまちがったことを語ったのなら、そのまちがった点を証しせよ」

Arm: et'e č'ar inč' xawsec'ay, vkayea vasn č'arin

Goth: jabai ubilaba rodida, weitwodei bi þata ubil

2Tm 2,11 εἰ συναπεθάνομεν, καὶ συζήσομεν 「私たちは〔キリストと〕共に死んだなら、〔キリストと〕共に生きもするであろう」

Arm: et'ē ənd nma meřak', ənd nmin ew kec'c'owk'

Goth: jabai miþgadauþnodedum, jah miþlibam

c) 未来と共に⁽³⁾：

ギリシア語条件節の時制が現在または過去の場合と異なり、ギリシア語未来に対してはアルメニア語では接続法アオリスト、接続法現在、直説法現在によって訳し分けているが、ゴート語では直説法現在のみで訳している。

Mt 26,33 εἰ πάντες σκανδαλισθήσονται ἐν σοί, ἐγὼ οὐδέποτε σκανδαλισθήσομαι 「皆があなたに躓くにしても、この私は決して躓かない」

Arm: t'epēt ew amenek'ean gayt'aglec'en i k'ēn, sakayn es oč' gayt'aglec'ayc'

Lk 11,8 εἰ καὶ οὐ δώσει αὐτῷ ἀναστὰς διὰ τὸ εἶναι φίλον αὐτοῦ, διὰ γε τὴν ἀναίδειαν αὐτοῦ ἐγερθεὶς δώσει αὐτῷ ὅσων χρήζει 「彼は〔自分が〕その人の友人であるからといって、起きてその人に〔パンを〕与えるようなことはないとしても、その人が〔執拗に願えば、〕その執拗さゆえに、起きてその人に必要なものを与えるだろう」

Arm: et'e oč' yarowc'eal tayc'ē nma vasn barekamowt'eann, sakayn vasn žtowt'eann yarowc'eal tac'ē (M: tayc'ē) nma zinč' ew pitoy ic'ē

1Cor 9,11 εἰ ἡμεῖς ὑμῖν τὰ πνευματικὰ ἐσπείραμεν, μέγα εἰ ἡμεῖς ὑμῶν τὰ σαρκικὰ θερίσομεν; 「もしも私たちが、あなたたちに霊的なものを蒔いたのなら、私たちがあなたたちの肉的なものを刈り取ることになるとしても、それは何か重大なことなのであろうか」

Arm: et'ē mek' i jez zhogeworsn sermanec'ak', mec inč' ē, et'ē i jēnĵ zmarmnaworsd hnjič'emk'

2Tm 2,12 εἰ ἀρνησόμεθα, κἀκεῖνος ἀρνησεται ἡμᾶς 「私たちが〔キリストを〕否むなら、彼もまた私たちが否むだろう」

Arm: et'ē owranamk', ew na owranay zmez

Goth: jabai afaikam, jah is afaikiþ uns

以下に挙げる箇所は Gk : 直説法 = Arm : 直説法 = Goth : 希求法の対応をみせている。ゴート語では条件節に希求法現在が用いられているので、一般的には生起可能な仮定を表す条件文（ギリシア語の ἐάν による条件文にあたる）と捉えている。

Mt 5,29-30 εἰ δὲ ὁ ὀφθαλμὸς σου ὁ δεξιὸς σκανδαλίζει σε, ἔξελε αὐτὸν καὶ βάλε ἀπὸ σοῦ· ... (30) καὶ εἰ ἡ δεξιὰ σου χεὶρ σκανδαλίζει σε, ἔκκοψον αὐτήν καὶ βάλε ἀπὸ σοῦ 「もしあなたの右の目があなたを躓かせるなら、それを抉り取って投げ捨ててしまえ。... (30)また、もしあなたの右の手があなたを躓かせるなら、それを切り取って投げ捨ててしまえ」

Arm: et'e akn k'o aj gayt'aglec'owc'anē zk'ez, xlea zna ew ankea i k'ēn ... (30) ew

et'e aj jeřn k'o gayt'aglec'owc'anē zk'ez, hat zna ew ənkea i k'ēn

Goth: jabai augo þein þata taihswo marzjai þuk, usstagg ita jah wairp af þus ...

(30) jah jabai taihswo þeina handus marzjai þuk, afmait þo jah wairp af þus

Lk 4,3 εἰ υἱὸς εἶ τοῦ θεοῦ, εἰπέ τῷ λίθῳ τούτῳ ἵνα γένηται ἄρτος 「もしお前が神の子ならば、この石にパンになるように言え」 (cf. Lk 4,9)

Arm: et'e ordi es AY, asa k'arid aydmik zi hac' lic'i

Goth: jabai sunaus sijais gudis, qiþ þamma staina ei wairþai hlaibs

Jn 10,24 εἰ σὺ εἶ ὁ Χριστός, εἰπέ ἡμῖν παρρησίᾳ 「あなたがキリストなら、はっきりと言ってくれ」

Arm: et'e dow es K'Sn, asa mez hamarjak

Goth: jabai þu sijais Xristus, qiþ unsis andaugiba

Jn 10,37 εἰ οὐ ποιῶ τὰ ἔργα τοῦ πατρὸς μου, μὴ πιστεύετε μοι 「私が父の業を行っていないなら、私の言うことを信じるのをやめよ」

Arm: et'e oč' gorcem zgorcs hawr imoy, mi hawatayk' inj

Goth: niba taujaui waurstwa attina meinis, ni galaubeiþ mis

Gal 5,11 εἰ περιτομήν ἔτι κηρύσσω, τί ἔτι διώκομαι 「もしも私が今なお割礼を宣傳しているのならば、なぜ今なお私は迫害を受けているのだろうか」

Arm: et'ē t'lp'atowt'iwn k'arozēi, əndēr? takawin halacim

Goth: jabai bimait merjau, duhve þanamais wrikada?

以下に挙げる箇所は Gk : 直説法 = Arm : 接続法 = Goth : 希求法の対応をみせている :

Mk 4,23 εἰ τις ἔχει ὦτα ἀκούειν ἀκούετω 「聞く耳もつ者ならば聞け」

Arm: et'e ok' ownic'i akanjs lseloy lowic'ē

Goth: jabai hvas habai ausona hausjandona, gahausjai

2Cor 11,30 εἰ καυχᾶσθαι δεῖ, τὰ τῆς ἀσθενείας μου καυχῆσομαι 「もし誇らねばならないとするなら、私の弱さゆえのことがらを私は誇ろう」

Arm: et'ē parcel inč' part ic'ē, ztkarowt'eann parcec'ayc'

Goth: jabai hvopan skuld sijai, þaim siukeins meinaizos hvopau

以下に挙げる箇所は Gk : 直説法 = Arm : 接続法 = Goth : 直説法の対応をみせている :

Ro 8,9 ὑμεῖς δὲ οὐκ ἐστέ ἐν σαρκὶ ἀλλὰ ἐν πνεύματι, εἶπερ πνεῦμα θεοῦ οἴκεῖ ἐν

ὕμῶν. εἰ δέ τις πνεῦμα Χριστοῦ οὐκ ἔχει, οὗτος οὐκ ἔστιν αὐτοῦ 「もしも神の靈があなた方のうちに住んでいるのなら、あなた方は肉のうちではなく、靈のうちにいる。もしも誰かがキリストの靈を持たないのなら、その人はキリストのものではない」

Arm: dowk' oč' ēk' marmnov ayl hogwov, et'ē ic'ē hogin AY i jez bnakeal. apa et'ē ok' zhogi K'Si oč' owni(直), sa č'ē nora

Goth: jus ni sijub in leika, ak in ahmin, sweþauh jabai ahma gudis bauþ in izwis. iþ jabai hvas ahman Xristaus ni habaiþ, sa nist is

ゴート語において第 1 類条件に希求法が用いられる場合、以上の例が示すように、それはすべて現在形であった。次節で述べられるように、希求法過去は原則として第 2 類条件に特化された範疇であるからである。しかし最後に、等位された第 1 類条件に関して興味深い現象がゴート語に観察される：

Jn 15,20 εἰ ἐμὲ ἐδίωξαν, καὶ ὑμᾶς διώξουσιν· εἰ τὸν λόγον μου ἐτήρησαν, καὶ τὸν ὑμέτερον τηρήσουσιν 「彼らが私を迫害したのであれば、あなた方をも迫害することであろう。仮に彼らが私の言葉を守ったとすれば、あなた方の〔言葉〕をも守ることであろう」

Arm: et'ē zis halacec'in, apa ew zjez halacesc'en· et'ē zbann im parhec'in, apa ew zjern parhesc'en

Goth: jabai mik wrekun, jah izwis wrikand; jabai mein waurd fastaidedeina, jah izwar fastaina

ギリシア語において等位された条件節の 2 つの直説法アオリスト形に対して、アルメニア語も同様に直説法アオリスト形で訳している。しかし、ゴート語訳者は先行する条件節には直説法過去形を用いて現実的な条件とみなしているが、後続する条件節には希求法過去形を用いて、前者に関連して可能的な条件と捉えている。帰結節は希求法現在であるから、この条件が第 1 類条件であることには違いがない。等位された条件節における叙法の交替はゴート語に時として見られる特有の現象である(下記 2. 2. 3 参照)。

2. 2. 2. 第 2 類条件

a) 明示的な条件節

これは、事実に反すると仮定されていることを示す条件である。単に「事実に反する」条件と言えないのは、話し手がある条件を事実に反すると仮定しているとしても、

実際には事実である条件を提示していることもあるからである。ギリシア語では条件節に *εἰ*+直説法（過去時制、通常はアオリストまたは未完了過去）、帰結節に通常 *ἄν*（この小辞を欠く例もいくつか見られる）+直説法（過去時制）という構造で示される。

第 2 類条件には現在の事実と仮定される条件と過去の事実と仮定される条件の 2 種類があり⁽⁴⁾、原則として、前者は条件節と帰結節の双方に未完了過去を用い、現在時において事実ではないことに言及する。後者は条件節と帰結節の双方にアオリストを用いて、過去時において事実ではなかったことに言及する。以下は、ギリシア語未完了過去の例である。アルメニア語ではギリシア語と同じく一貫して未完了過去⁽⁵⁾、ゴート語では一貫して希求法過去が対応する⁽⁶⁾：

Jn 5,46 *εἰ ἐπιστεύετε Μωϋσεί, ἐπιστεύετε ἄν ἐμοί* 「仮にあなたたちがモーセの言ったことを信じたとすれば、私の言うことも信じたことであろう」

Arm: et'e hawatayik' dowk' Movsēsi, hawatayik' ardewk' ew inj

Goth: jabai allis Mose galaubidedeiþ, ga-bau-laubidedeiþ mis

Jn 8,42 *εἰ ὁ θεὸς πατὴρ ὑμῶν ἦν, ἠγαπάτε ἄν ἐμέ* 「仮に神があなた方の父であったなら、あなた方は私を愛したはずである」

Arm: et'e AC ēr hayr jer, sireik' ardewk' zis

Goth: jabai guþ atta izwar wesi, frijodedeiþ þau mik

Jn 15,19 *εἰ ἐκ τοῦ κόσμου ἦτε, ὁ κόσμος ἄν τὸ ἴδιον ἐφίλει* 「仮にあなた方が世からのものであったなら、世は自分に属するものとしてほれこんでいたことだろう」

Arm: et'e yašxarhē asti eik', ašxarh ziwrn sirēr ardewk'

Goth: jabai þis fairhwaus weseiþ, aiþþau so manaseds swesans frijodedi

以下は、ギリシア語で条件節・帰結節ともにアオリストが用いられている例である。アルメニア語では未完了過去とアオリストの区別を持っているにもかかわらず、第 2 類条件には未完了過去しか用いない。特に条件節ではアオリスト分詞+未完了過去繫辞の迂言的形式が特徴的であるが、これは過去完了(*plusquamperfectum*)であって、原文のアオリストが意識されたことによるものではないかと考えられる。時系列的に条件節は帰結節に先行するから、両節に異なる時制形を用いることも可能であった(下記 Mt 11,23; 1Cor 2,8; Ro 7,7 参照)。ゴート語にこのような区別はなく、現在の事実と仮定される条件文の場合と同様に、帰結節には条件節と同じく希求法過去が現れる：

Mt 11,23 *εἰ ἐν Σοδόμοις ἐγενήθησαν αἱ δυνάμεις αἱ γινόμεναι ἐν σοί, ἔμεινεν ἄν*

μέχρι τῆς σήμερον 「もしもお前の中で生じた力ある業がソドムで生じたなら、〔ソドムは〕今日に至るまであり続けたであろう」

Arm: et'e i Sidom (M: Sodovm) eʔeal ein zawrowt'iwnk'n or eʔen i k'ez, apak'ēn kayin ews minč'ew c'aysawr

Goth: jabai in Saudaumjam waurbeina mahteis þos waurþanons in izwis, aiþþau eis weseina und hina dag

1Cor 2,8 εἰ ἐγνώσαν, οὐκ ἄν τὸν κύριον τῆς δόξης ἐσταύρωσαν 「もしも彼らが〔それを〕知っていたなら、栄光の主を十字架につけたりはしなかったであろう」

Arm: et'ē ēr canowc'eal, oč' ardewk' zTR p'ařac'n i hač' hanēin

しかし、アルメニア語では、迂言的形式は条件節だけでなく帰結節に現れることも (Jn 11,21)、また帰結節にしか現れないこともあった (Jn 14,28) :

Jn 11,21 εἰ ἦς ὧδε οὐκ ἄν ἀπέθανεν ὁ ἀδελφός μου 「あなたがここにいてくれたなら、私の兄弟は死ななかつただろうに」 (cf. Jn 11,32)

Arm: et'e ast lieal eir, eʔbayrn im č'ēr meřeal

Goth: ip weseiþ her, ni þau gadauþnodedi broþar meins

Jn 14,28 εἰ ἠγαπατέ με ἐχάρητε ἄν ὅτι πορεύομαι πρὸς τὸν πατέρα 「仮に私を愛していたのなら、あなたたちは私が父のもとに行くのを喜んでくれたはずだ」

Arm: t'e sireik' zis, apa owrax lieal ēr jer t'e es ař hayr ert'am

Goth: jabai frijodedeiþ mik, aiþþau jus faginodedeiþ ei ik gagga du attin

b) ゴートにおける非明示的な条件節

上記 Jn 11,21 でも見られたように、ゴート語には、第 2 類条件の条件節が明示的な接続詞 *jabai* ではなく、接続詞として働く小辞によって導入されるという顕著な特徴が認められる。すなわち *ip* は第 2 類条件のみで肯定的な条件 *jabai* に代用される小辞であり、特にヨハネ福音書に多く用いられる。こうした特徴はアルメニア語には見られない。他方、*þau(h)* は *ἄν* に対応して第 2 類条件の帰結節を導く小辞である。*aiþþau* も同じく帰結節を導く標識である。アルメニア語では *apa* , *apak'ēn* や *ardewk'* が現れることがある。また、ゴート語には *ni(h)* という第 2 類条件のみで否定条件節を導く小辞があり *εἰ μή* に対応している。Streitberg (1981: 94) は *ip* や *ni(h)* によって導かれる条件文を「接続詞を伴わない条件文」として明示的な「接続詞を伴う条件文」から区別している。

以下は条件節に未完了過去が用いられている例である。通常 *ip* は文頭に置かれるが、Lk 7,39 はギリシア語の語順にならない、文頭から第 2 番目の位置に置かれている唯一の

例である：

Lk 7,39 οὗτος εἰ ἦν προφήτης, ἐγίνωσκειν ἂν τίς καὶ ποταπὴ ἢ γυνὴ ἣτις ἄπτεται αὐτοῦ, ὅτι ἁμαρτωλὸς ἐστίν 「万が一にもこの人が預言者であったなら、自分に触っているこの女が誰でどんな類の女か知り得たろうに。〔この女は〕罪人なのだ」

Arm: sa t'e (M: et'e) margarē ok' ēr, apa gitēr t'e ov (M: o) ew orpisi ok' kin merjanay i sa, zi melawor ē

Goth: sa **ip wesī** praufetus, **ufkunbēdi** þau, hvo jah hvileika so qino sei tekib imma, þatei frawaurhta ist

Jn 8,19 εἰ ἐμὲ ἴδείτε, καὶ τὸν πατέρα μου ἂν ἴδείτε 「仮にあなた方が私のことが分かっていたとすれば、私の父のことも分かっていたであろう」

Arm: et'e zis giteik', ew zhayrn im t'erews giteik'

Goth: **ip mik kunbedeiþ**, jah þau attan meinana kunbedeiþ

Jn 8,39 εἰ τέκνα τοῦ Ἀβραάμ ἐστε, τὰ ἔργα τοῦ Ἀβραάμ ἐποιεῖτε 「アブラハムの子供たちであるのなら、あなた方はアブラハムの業を行っていた〔はずである〕」

Arm: et'e ordik' Abrahamow eik', zgorcsn Abrahamow gorceik'

Goth: **ip barna Abrahamis weseiþ**, waurstwa Abrahamis tawidedeiþ

この箇所の本来的なテキストは混合型の条件文で、条件節が εἰ ... ἐστε、そして帰結節は ἐποιεῖτε であったと見られる（先行する 37 節で「あなた方がアブラハムの子孫であることは分かっている」と記されている）。アルメニア語もゴート語も条件節に過去形を用いて、事実に反する条件文と解釈している（Streitberg は ἐστε ではなく ἦτε と復元している）。

Jn 9,33 εἰ μὴ ἦν οὗτος παρὰ θεοῦ, οὐκ ἠδύνατο ποιεῖν οὐδέν 「あの方が仮に神からの方でなかったとすれば、何もできなかったはずだ」

Arm: et'e oc' y-AY ēr ayr-n ayn, oc' karēr aṙnel inč

Goth: **nih wesī** sa fram guda, ni mahtedi taujan ni waiht

Jn 9,41 εἰ τυφλοὶ ἦτε, οὐκ ἂν εἶχετε ἁμαρτίαν 「仮にあなた方が盲人であったとすれば、あなた方に罪はなかったことだろう」

Arm: et'e koyrk' eik', oc' ēr jer meł

Goth: **ip blindai weseiþ**, ni þau habaidedeiþ frawaurhtais

Jn 14,7 εἰ ἐγνώκατέ με, καὶ τὸν πατέρα μου γνώσεσθε 「あなた方が私を知っているなら、私の父をも知るようになる」

Arm: et'e zis giteik', apa ew zhayr im giteik'

Goth: **ip** kunbedeiþ mik, aiþþau kunbedeiþ jah attan meinana

大方に採用されているこの箇所を読みは第 1 条件として約束の言葉と解されている。すなわち条件節の動詞はアオリストであり、帰結節の動詞は未来である。しかし、動詞形およびゴート語における **ip** の存在から見ると、アルメニア語・ゴート語はともにこの箇所を事実と反する仮定とその帰結からなる第 2 条件と非難の意味に解釈している（「仮にあなた方が私を知っていたとすれば、私の父をも知っていたはずだ」）⁽⁷⁾。ゴート語訳では帰結節の語順も前後変更されている。

Jn 18,30 εἰ μὴ ἦν οὗτος κακὸν ποιῶν, οὐκ ἂν σοι παρεδώκαμεν αὐτόν 「この男が悪事を働いていなかったとすれば、私たちはあなたに彼を引き渡すことはしなかっただろう」

Arm: et'e č'ēr č'aragorc ayrn ayn, apa oč' matneak' zna k'ez

Goth: **nih** wesi sa ubiltojis, ni þau weis atgebeima þus ina

Jn 18,36 εἰ ἐκ τοῦ κόσμου τούτου ἦν ἡ βασιλεία ἡ ἐμή, οἱ ὑπηρεταὶ οἱ ἐμοὶ ἠγωνίζοντο ἄν ἵνα μὴ παραδοθῶ τοῖς Ἰουδαίοις 「仮に私の王国がこの世からのものであったなら、私の下役たちが、私がユダヤ人たちに引き渡されないようにと闘っていたことであろう」

Arm: et'e yašxarhē asti ēr ark'ayowt'iwnn im, spasawork'n im martnč'ēin ardewk' zi mi matnec'ayc' hreic'

Goth: **ip** us þamma fairhwau wesi meina þiudangardi, aiþþau andbahtos meinai usdauidedeina, ei ni galewiþs wesjau Iudaium

Jn 19,11 οὐκ εἶχες ἐξουσίαν κατ' ἐμοῦ οὐδεμίαν εἰ μὴ ἦν δεδομένον σοι ἄνωθεν 「上から与えられていたのでなければ、あなたには私に対して何の権力もなかったことだろう」

Arm: oč' owneir dow išxanowt'iwn i veray im ew oč' mi, et'e oč' ēr towéal k'ez i verowst

Goth: ni aihtedeis waldufnje ainhun ana mik, **nih** wesi þus atgiban iupaþro

Ro 7,7 τὴν τε γὰρ ἐπιθυμίαν οὐκ ᾔδειν εἰ μὴ ὁ νόμος ἔλεγεν, οὐκ ἐπιθυμήσεις 「もしも律法が『あなたは欲望を持ってはならない』と言わなかったならば、私は欲望を知らなかったであろう」

Arm: zc'ankowt'iwn oč' čanač'ēi, et'ē oč' ōrinac'n ēr asac'eal, mi c'ankanayc'es

Goth: lustu nih wissedjau, **nih** witop geþi: ni gairnjais

以下は、ギリシア語で条件節にアオリストが用いられている例である：

Mt 11,21 εἰ ἐν Τύρῳ καὶ Σιδῶνι ἐγένοντο αἱ δυνάμεις αἱ γινόμεναι ἐν ὑμῖν, πάλαι ἂν ἐν σάκκῳ καὶ σποδῷ μετενόησαν 「もしお前たちの中で生じた力ある業がテュロスとシドンで生じたなら、彼らはとつくに荒布と灰の中で回心していたであろう」

Arm: et'e i Tiwros ew i Sidovn eḷeal ein zawrowt'iwnk'n or i jez eḷen, vaḷow ews ardewk' xorgov ew moxrov apašxareal ēr

Goth: **ip** waurbeina in Twre jah Seidone landa mahteis þos waurþanons in izwis, airis þau in sakkau jah azgon idreigodedeina (語順変更)

Mk 13,20 εἰ μὴ ἐκολόβωσεν κύριος τὰς ἡμέρας, οὐκ ἂν ἐσώθη πᾶσα σάρξ· ἀλλὰ διὰ τοὺς ἐκλεκτοὺς οὗς ἐξελέξατο ἐκολόβωσεν τὰς ἡμέρας 「もし主がその日々を縮めてくださらなかったならば、肉なるものは一人たりとも救われることがなかつたであろう。しかし主は、自らのために選んだ者たちのゆえに、その日々を縮められたのだ」

Arm: et'e oč' ēr karčēal AY zawowrsn zaynosik vasn əntreloc' iwroc', oč' aprēr amenayn marmin' ayl' vasn əntreloc'n zors əntreac' karčēac' zawowrsn zaynosik

Goth: **ni** frauja gamaurgidedi þans dagans, ni þauh ganesi ainhun leike; akei in þize gawalidane, þanzei gawalida, gamaurgida þans dagans

ギリシア語原文では「縮める」という意味の動詞が条件節でも、事実としての陳述でも同じ ἐκολόβωσεν が用いられているのに対して、アルメニア語訳では前者に分詞＋繫辞未完了過去からなる迂言法 ēr karčēal、後者には直説法アオリスト karčēac'、ゴート語では前者に希求法過去 gamaurgidedi、後者に直説法過去 gamaurgida を用いて明確に区別している。

Lk 10,13 εἰ ἐν Τύρῳ καὶ Σιδῶνι ἐγενήθησαν αἱ δυνάμεις αἱ γινόμεναι ἐν ὑμῖν, πάλαι ἂν ἐν σάκκῳ καὶ σποδῷ καθήμενοι μετενόησαν 「もしお前たちの中で生じた力ある業がテュロスとシドンで生じたなら、彼らはとつくに荒布と灰の中に座し、回心していたであろう」

Arm: et'e i Tiwros ew i Sidovn eḷeal ein zawrowt'iwnk'n or eḷen i jez, vaḷowc' ews ardewk' i xorg ew i moxir nsteal ew apašxareal ēr

Goth: **ip** in Twrai jah Seidonai waurbeina mahteis þozei waurþun in izwis, airis þau in sakkum jah azgon sitandeins gaidreigodedeina

Jn 15,22 εἰ μὴ ἦλθον καὶ ἐλάλησα αὐτοῖς, ἁμαρτίαν οὐκ εἶχουσιν 「仮に私が来て彼らに語ることがなかつたとすれば、彼らには罪がなかつただろう」

Arm: im et'e č' ēr ekeal ew xawsec'eal ənd nosa, meḷ inč' oč' govr noc'a

Goth: **nih** gemjau jah rodidedjau du im, frawaurht ni habaidedeina

Jn 15,24 εἰ τὰ ἔργα μὴ ἐποίησα ἐν αὐτοῖς ἃ οὐδεὶς ἄλλος ἐποίησεν, ἀμαρτίαν οὐκ εἶχουσαν 「仮に私が他の誰も行ったことのない業を彼らの間だけで行わなかったとすれば、彼らには罪がなかつたろう」

Arm: zgorcsn č'ēr gorceal i nosa zor oč' ayl ok' gorceac', meļ inč' oč' goyr noc'a

Goth: **ip** þo waurstwa ni gatawidedjau in im þoei anþar ainshun ni gatawida, frawaurht ni habaidedeina

Ro 9,29 εἰ μὴ κύριος Σαβαώθ ἐγκατέλιπεν ἡμῖν σπέρμα, ὡς Σόδομα ἂν ἐγενήθημεν καὶ ὡς Γόμορρα ἂν ὠμοιώθημεν 「もしも万軍の主が私たちに子孫を残さなかったならば、私たちはソドムのようになったであろうし、またゴモラとおなじようにされたであろう」

Arm: et'ē oč' TN zōrowt'eanc' t'oleal ēr mez zawak, ibrew z·Sodom linēak' ew Gomoroy nmanēak'

Goth: **nih** frauja Sabaop bilibi unsis fraiwa, swe Saudauma þau waurbeima jah swe Gaumaurra þau galeikai waurbeima

これらの例からも、アルメニア語はギリシア語条件節の直説法アオリストに対して分詞+未完了過去繫辞からなる迂言的形式を好んで用いたことが分かる。ゴート語では希求法過去が第2類条件の条件節と帰結節の双方にほぼ特化されたために、非明示的な条件文が可能になったと考えられる。

2.2.3. 第3類条件

このタイプに属する条件は基本的に可能性を提示するが、その表す意味領域は広範であり、現在時における論理的連関 (if A, then B)、時には「現在の一般的条件」とも呼ばれ、条件節の実現の見込みにはなんら言及しないものから、単なる仮説的状況もしくはおそらく実現する見込みの少ないもの、そして実現する見込みの高い未来の事態などを包括している。概して言えば、現在の一般的条件は現在時における総称的 (generic) な状況に焦点を当てるが、より生起可能性の高い未来は未来時における特定の (specific) な状況に焦点を当てるものである。

アルメニア語においてこのタイプの条件に対応するのは、条件節に接続法を伴うもので、假定、可能性、不確実性、一般化などを表現するとされる (Jensen 1959: 223)。ゴート語ではこのタイプの条件節は jabai+直説法あるいは希求法によって標示される⁽⁸⁾。次の箇所はギリシア語接続法現在に対してアルメニア語で接続法現在、ゴート語で希求法現在が用いられている：

Lk 10,6 ἐὰν ἐκεῖ ᾗ υἱὸς εἰρήνης, ἐπαναπαήσεται ἐπ’ αὐτὸν ἢ εἰρήνη ὑμῶν 「もし平安の子がそこにいるならば、あなたたちの平安はその者の上に憩うだろう」

Arm: et'e ic'ē and ordi oljowni, hangic'ē i veray nora oljown jer

Goth: jabai sijai jainar sunus gawairþjis, gahweilaip sik ana imma gawairþi izwar

1Cor 13,2 ἐὰν ἔχω προφητείαν καὶ εἶδῶ τὰ μυστήρια πάντα καὶ πάσαν τὴν γνῶσιν καὶ ἐὰν ἔχω πάσαν τὴν πίστιν ὥστε ὄρη μεθιστάναι, ἀγάπην δὲ μὴ ἔχω, οὐθέν εἰμι 「もしも私が預言をなし、さらにすべての奥義とあらゆる知識を持ってはいても、またもしも私が山々を移すほどのあらゆる信仰を持ってはいても、しかし私が愛を持ってはいないなら、私は無である」

Arm: et'ē ownic'im zmargarēowt'iwn ew gitic'em zxorhowrds amenayn ew zamenayn gitowt'iwn, ew et'ē ownic'im zamenayn hawats minč'ew zlerins p'op'oxeloy ewšēr oč' ownic'im, oč'inč em

Goth: jabai habau praufetjans jah witjau allaize runos jah all kuniþi jah habau alla galaubein, swaswe fairgunja miþsatjan, ip friapwa ni habau, ni waihts im

次ではギリシア語接続法アオリストに対してアルメニア語では接続法現在、ゴート語では直説法現在：

Mt 6,14 ἐὰν γὰρ ἀφῆτε τοῖς ἀνθρώποις τὰ παραπτώματα αὐτῶν, ἀφήσει καὶ ὑμῖν ὁ πατὴρ ὑμῶν ὁ οὐράνιος 「もしあなた方が人々の過ちを赦すのであれば、天のあなた方の父もあなた方を赦してくれるだろう」

Arm: et'e t'olowc'owk' mardkan zyanc'ans noc'a, t'olc'ē ew jez hayr jer erkawor

Goth: jabai afletip mannam missadedins ize, afletip jah izwis atta izwar sa ufar himinam

次の例では、ギリシア語条件節の接続法アオリストにアルメニア語では接続法アオリスト、ゴート語では直説法現在が対応している：

Mk 5,28 ἐὰν ἄψωμαι κὰν τῶν ἱματίων αὐτοῦ σωθήσομαι 「あの方の着物にでもいいから触れば、私は救われる」

Arm: t'e (M: et'e) miayn merjec'ayc' i handerjs nora p'rkec'ayc'

Goth: jabai wastjom is atteka, ganisa

次の例は、疑問文の内部に第3類条件が埋め込まれており、その前に第1類条件が先

行しているという重層構造である。アルメニア語では前者の第 3 類条件節に接続法アオリスト、帰結節の疑問には疑念を表すために接続法現在が用いられている：

Jn 3,12 **εἰ** τὰ ἐπίγεια εἶπον ὑμῖν καὶ οὐ πιστεύετε, πῶς **ἐάν** εἶπω ὑμῖν τὰ ἐπουράνια πιστεύετε; 「私が地上のことを話したのに、あなたが信じないとすれば、天上のことを話しても、果たして信じるようになるだろうか」

Arm: **et'e** zerkrawors asac'i jez ew oc' hawatayk', ziard? **et'e** zerknaworsn asac'ic' hawatayc'ek'

次の例でも同様に、接続法を伴う条件節が直説法を伴う条件節に後続しており、前者はあるいは起こるかもしれない出来事を表しているのに対して、後者は過去の出来事について断定的に用いられている。これに対応してアルメニア語では前者を t'e+接続法（疑念ゆえに現在形）、後者を et'e+直説法で訳し分けている：

Lk 16,31 **εἰ** Μωϋσέως καὶ τῶν προφητῶν οὐκ ἀκούουσιν, οὐδ' **ἐάν** τις ἐκ νεκρῶν ἀναστῆ πεισθήσονται 「もし彼らがモーセと預言者たちとに聞かないならば、たとえ誰かが死者の中から甦ったとしても、彼らが説得されることはないだろう」

Arm: **et'e** Movsēsi ew margarēic'n oc' lsen, ew oc' **t'e** i meṛeloc' ok' yaṛnic'ē hawanesc'in

次でもアルメニア語では et'e+直説法と t'e+接続法の連鎖を示しているが、ゴート語では εἰ 節の事実としてのニュアンスを生かすために **pande**+直説法を用いている（注(2)参照）：

Jn 13,17 **εἰ** ταῦτα οἴδατε, μακάριοί ἐστε **ἐάν** πολήτε αὐτά 「このことが分かっている以上、これを行うなら、あなた方は幸いだ」

Arm: **et'e** zays gitēk', eraneli ews ēk' **t'e** aṛnic'ēk' zays

Goth: **pande** þata witub, audagai sijub, **jabai** taujiþ þata

以下の箇所では第 3 類条件（24-25 節）と第 1 類条件（26 節）の連鎖が見られ、前者の接続法アオリスト、後者の 2 つの動詞の直説法アオリストに対して、アルメニア語では前者に接続法アオリスト(*bažanesc'i*)、後者には直説法アオリスト(*yareaw*)+接続法現在 (*bažaneal ic'ē*)が応じている。この最後の用法はいわゆる *Conj. consecutiv* で、第 2 の動詞が第 1 の動詞の動作に関連して起こり得る一つの結果を表しており、アルメニア語翻訳者の接続法に対する繊細な感性が条件節でも柔軟に発揮された例である

(千種 1997: 20; Meillet 1910-11 [= 1962]: 107f.)。ゴート語の動詞はすべて直説法である：

Mk 3,24-26 **ἐὰν** βασιλεία ἐφ’ ἐαυτὴν μερισθῆ, οὐ δύναται σταθῆναι ἡ βασιλεία ἐκείνη· (25)καὶ **ἐὰν** οἰκία ἐφ’ ἐαυτὴν μερισθῆ, οὐ δύνησεται ἡ οἰκία ἐκείνη σταθῆναι. (26)καὶ **εἰ** ὁ σατανᾶς ἀνέστη ἐφ’ ἐαυτὸν καὶ ἐμερίσθη, οὐ δύναται στῆναι ἀλλὰ τέλος ἔχει 「一つの王国が自らに敵対して分裂したなら、その王国は立ち行くことができない。(25)また一軒の家が自らに敵対して分裂したなら、その家は立ち行くことができない。(26)また、もしサタンが自らに敵対して立ち上がり、分裂するならば、立ち行くことができず、終りを迎えてしまう」

Arm: ard **et’ē** t’agaworowt’iwn yanjn iwr bažanesc’i, oč’ karē kal t’agaworowt’iwnn ayn. (25)ew **et’ē** town yanjn iwr bažanesc’i, oč’ karē kal townn. (26)ew **et’ē** satana i veray anjin yareaw ew bažaneal ic’ē, oč’ karē kal, ayl vaxčaneal ē

Goth: **jabai** þiudangardi wiþra sik gadailjada, ni mag standan so þiudangardi jaina. (25)jah **jabai** gards wiþra sik gadailjada, ni mag standan sa gards jains. (26)jah **jabai** Satana usstob ana sik silban jah gadailips warþ, ni mag gastandan, ak andi habaiþ

次は現在の一般的条件の例である。ギリシア語で接続法が用いられているのは、主語が不定だからであって、未来の出来事だからではない。アルメニア語もゴート語も直説法を用いているのは、当該の事態が現実にかかる可能性に関して何ら疑念がないと認識されているからである：

Jn 11,9 **ἐὰν** τις περιπατῆ ἐν τῇ ἡμέρᾳ, οὐ προσκόπτει 「人が昼間歩むなら、躓くことはない」

Arm: et’ē ok’ gna towənʒean, oč’ gayt’akli

Goth: jabai hwas gaggiþ in dag, ni gastiggqiþ

しかし、直説法現在の使用が現在の一般的条件にのみ限るのではないことは、次の箇所でもアルメニア語とゴート語条件節に直説法が現れていることから理解される：

Mt 6,22 **ἐὰν** οὖν ᾗ ὁ ὀφθαλμὸς σου ἀπλοῦς, ὅλον τὸ σῶμά σου φωτεινὸν ἔσται 「もしあなたの目が純真なら、あなたの体は全体が輝いているだろう」

Arm: et’ē akn k’o ařat ē, amenayn marmind lowsawor elic’i

Goth: jabai nu augo þein ainfaþ ist, allata leik þein liuhadein wairþiþ

Lk 5,12 ἐὰν θέλῃς δύνασαί με καθαρίσαι 「もしあなたがお望みなら、清めていただけるのだが」

Arm: et'e kamis, karō es zis srbel

Goth: jabai wileis, magt mik gahrainjan

Jn 7,17 ἐὰν τις θέλῃ τὸ θέλημα αὐτοῦ ποιεῖν, γνώσεται περὶ τῆς διδαχῆς 「人がその方の意志を行いたいと思っていれば、この教えについて知るようになるだろう」

Arm: et'e ok' kami zkams nora aṛnel, gitasc'ē vasn vardapetowt'eans

Goth: jabai hwas wili wiljan is taujan, ufkunnaþ bi þo laisein

しかし、次の例ではギリシア語接続法現在に対してアルメニア語が直説法現在を用いているのに対し、ゴート語は希求法現在を示している：

Lk 6,33 καὶ ἐὰν ἀγαθοποιῆτε τοὺς ἀγαθοποιούντας ὑμᾶς, ποία ὑμῖν χάρις ἐστίν;
「もしあなたたちに良くしてくれる人たちに良くしてやったとしても、あなたたちにどのような恵みがあるというのか」

Arm: ew et'e bari aṛnēk' barerarc' jeroc', or? šnorh ē jer

Goth: jah jabai þiup taujaid þaim þiup taujandam izwis, hva izwis laune ist?

この叙法の交替現象は説明が難しいが、前後に置かれた平行句を考慮しなければ理解できないかもしれない。先行する Lk 6,32 εἰ ἀγαπάτε(直・現) τοὺς ἀγαπῶντας ὑμᾶς, ποία ὑμῖν χάρις ἐστίν; = et'e sirēk'(直・現) dowk' zsirelis jer, zinč'? šnorh ē jer = jabai frijod(直・現) þans frijondans izwis, hva izwis laune ist? 「もしあなたたちを愛してくれる者たちを愛したとしても、あなたたちにはどのような恵みがあるというのか」、後続する Lk 6,34 ἐὰν δανίσητε(接・アオ) παρ' ὧν ἐλπίζετε λαβεῖν, ποία ὑμῖν χάρις ἐστίν; = et'e tayk'(直・現) p'ox aynoč'ik, yoroc' akn ownik' aṛnowl, or? šnorh ē jer = jabai leihvid(直・現) fram þaime weneid andniman, hva izwis laune ist? 「取り返す望みのある者たちに金を貸したとしても、あなたたちにどのような恵みがあるというのか」から見て叙法を意図的に交替させる根拠はないと判断して、アルメニア語訳はギリシア語動詞形の差異を無視してすべて同じ直説法現在に揃えたと考えられるのに対して、ゴート誤訳は逆に中間の動詞形のみを希求法形にすることで叙法の同一化を避けたのではなかろうか⁽⁹⁾。

この叙法の交替と関連して興味深いのは、ゴート語において条件文が等位されると、直説法と希求法が並存することがあるという現象である(Streitberg 1981: 91f.; また上記 2.2.1 参照)。以下の各例ではギリシア語の第 1 条件ないし第 3 条件の等位に対し

て、アルメニア語訳者はすべて接続法で対応している。ところが、最初の例ではギリシア語の第3類条件接続法—第1類条件直説法の連続とは反対にゴート語は直説法—希求法、2番目の例ではギリシア語第3類条件接続法—第3類条件接続法に対してゴート語は直説法—希求法、3番目の例では第1類条件直説法—第1類条件直説法に対してゴート語希求法—直説法、そして最後の例では第3類条件接続法—第3類条件接続法に対して2番目の例とは逆にゴート語希求法—直説法というように実に多彩な対応を示している：

1Cor 7,8-9 καλὸν αὐτοῖς ἐὰν μείνωσιν ὡς κἀγώ· (9)εἰ δὲ οὐκ ἐγγρατεύονται, γαμησάτωσαν 「もしも彼らが、私もそうしているように、[現状に] 留まっているのなら、彼らにとってはそのほうがよい。しかし、もしも禁欲できないのであれば、彼らは結婚するがよい」

Arm: law ē noc'a t'ē kayc'en ibrew zis. (9)apa t'ē oc' ownic'in žoyž, amowsnasc'in
Goth: goþ ist im, jabai sind swe ik. (9)ip jabai ni gahabaina sik, liugandau

1Cor 14,24 ἐὰν δὲ πάντες προφητεύωσιν, εἰσέλθῃ δέ τις ἄπιστος ἢ ἰδιώτης, ἐλέγχεται ὑπὸ πάντων, ἀνακρίνεται ὑπὸ πάντων 「もしもすべての者が預言をし、そして誰か信じていない者あるいは初心者が入って来るとするのなら、その人はすべての人によって責められ、すべての者によってさばかれる」

Arm: isk et'ē amenek'ean margarēanayc'en, ew mtanic'ē ok' andr, anhawat kam
tgēt, yandimani yamenec'ownc', ew k'nni yamenec'ownc'

Goth: ip jabai allai praufetjand, ip innatgaggai hvas ungalaubjands aiþþau
unweis, gasakada fram allaim, ussokjada fram allaim

1Cor 7,12 εἴ τις ἀδελφὸς γυναῖκα ἔχει ἄπιστον καὶ αὕτη συννευδοκεῖ οἰκεῖν μετ' αὐτοῦ, μὴ ἀφίετω αὐτήν 「もしもある兄弟が信者でない妻を持ち、その彼女が彼と一緒に住むことを共に喜んでいるのなら、彼女を去らせてはいけない」

Arm: et'ē ok' eþbayr kin ownic'i anhawat, ew nma haçoy ic'ē bnakil ənd nma, mi
t'olc'ē zna

Goth: jabai hvas broþar qen aigi ungalaubjandein, jah so gawilja ist bauan miþ
imma, ni afletai þo qen

Jn 12,26 ἐὰν ἐμοί τις διακονῇ, ἐμοὶ ἀκολουθείτω ... ἐὰν τις ἐμοὶ διακονῇ τιμήσει αὐτὸν ὁ πατήρ 「誰かが私に仕えたければ、私について来い。…誰かが私に仕えるのなら、父はその人を尊重するだろう」

Arm: et'e ok' zis pašt'ic'ē zkni im ekec'ē ... et'e ok' zis pašt'ic'ē, patowesc'ē zna
hayrn im

Goth: jabai mis hvas andbahtjai, mik laistjai ... jabai hvas mis andbahtip,

sweraiþ ina atta

ゴート語において最初の 2 つの例では、先行する条件が現実的と仮定されれば、後続する条件はそれと関連して可能な結果と捉えられ、そして後の 2 つの例では逆に、先行する条件が可能なものとみなされれば、後続する条件はそれと関連して現実的と捉えられている。一見すると単純な叙法の交替ではあるが、特に最後の例は、アルメニア語では動詞に先行する代名詞が *ok' zis* で揃えられているのに対して、ゴート語ではギリシア語に忠実に *mis hvas ... hvas mis* と訳しているだけにいっそう動詞形の異化は際立っている。アルメニア語条件文における接続法が多少機械的に選択されているという印象を与えているのに対して、ゴート語条件文における叙法の選択は、当該の仮定が翻訳者によって現実的であるか単に可能性の問題であると捉えられているかに大きく依存している。

上記に見てきたように、ギリシア語の第 3 類条件 (および第 1 類条件) に対しては、アルメニア語とゴート語で実にさまざまな組み合わせがなされており、一対一の対応といった厳格な区別は存在しない。このタイプの条件自体がもつ意味領域の広さが、翻訳の過程で叙法上の多様な解釈をもたらしていると言えよう。

2.2.4. 第 4 類条件

この条件は未来における実現可能な条件、通常は実現可能性が低い条件を示すものとされ、条件節 $\epsilon\iota$ + 希求法および帰結節 $\delta\nu$ + 希求法で表現される。ヘレニズム期ギリシア語で接続法の使用範囲が増大して希求法の領域を侵害したため、コイネー期の新約聖書においては当然ながら完全な形の第 4 類条件は見られない。しかし、接続法の意味的領域はたしかにこの条件にも拡大した (結果的には第 3 類条件として包括された) のではあったが、依然として希求法は意識的に選ばれて狭い範囲ながらも機能していたことが、この条件に属するとされる以下のような例の存在によって明らかである。次のギリシア語の例では条件節と不完全な帰結節しか現れない:

1Pet 3,14 $\acute{\alpha}\lambda\lambda' \epsilon\iota \kappa\alpha\iota \pi\acute{\alpha}\sigma\chi\omicron\iota\tau\epsilon \delta\iota\acute{\alpha} \delta\iota\kappa\alpha\iota\omicron\sigma\acute{\upsilon}\nu\eta\eta\nu, \mu\acute{\alpha}\kappa\acute{\alpha}\rho\iota\omicron\iota$ 「たとえあなた方が義のために苦しむようなことがあったとしても、あなた方は幸いである」

Arm: *ayl t'ē ew č'arčaric'ik' ewš vasn ardarowt'ean, eraneli ēk'*

以下の例では、条件節は提示されず帰結節しか現れないとされるが、もはや条件節を補うまでもなく、ただ単に思考されていることを示す可能法 (Potentialis) として用いられており、新約聖書では間接疑問文の中で『ルカ福音書』と『使徒行伝』にしか現れない (Blass/Debrunner/Rehkopf 1990: 301; 312)。 $\delta\nu$ + 希求法という形式が原則であ

るが、以下に見られるように、ǎv を伴わない希求法（例えば Lk 1,29; 3,15）とは区別がなく、実際そのような異読（例えば Lk 15,26 τί εἶη ταῦτα）も存在する。アルメニア語では接続法現在、ゴート語では希求法過去が用いられる（t' e, et' e, þata は間接疑問文を名詞化する冠詞 τό に対する訳である）：

Lk 1,29 διελογίζετο ποταπὸς εἶη ὁ ἀσπασμὸς οὗτος 「彼女は、この挨拶はいったいなんのことだろうと思ひめぐらしていた」

Arm: xorxēr ənd mits t'e orpisi inč' ic'ē oljoyns ays

Goth: þahta sis hveleika wesi so goleins

Lk 1,62 ἐνένευον τῷ πατρὶ αὐτοῦ τὸ τί ἂν θέλοι καλεῖσθαι αὐτό 「彼らはその子の父親に合図を送り、彼がその子にどんな名をつけようとしているか〔うかがった〕」

Arm: akn arkanein hawrn nora t'e zinč'? kamic'i koč'el zna

Goth: gabandwidedun þan attin is, þata hvaiwa wildedi haitan ina

Lk 3,15 ... μήποτε αὐτὸς εἶη ὁ Χριστὸς 「ひょっとしてこの人こそイエスではないだろうか〔と、彼らは思ひめぐらしていた〕

Arm: ... mi t'e sa? ic'ē K'S

Goth: ... niu aufto sa wesi Xristus

Lk 6,11 διελάλουν πρὸς ἀλλήλους τί ἂν ποιήσαιεν τῷ Ἰησοῦ 「彼らはイエスに対してどういう手を打つたらよいか、互いに談合し始めた」

Arm: xawsein ənd mimeans et'e zinč'? ařnic'en YI

Goth: rodidedun du sis misso hva tawidedeina þamma Iesua

Lk 9,46 ... τὸ τίς ἂν εἶη μείζων αὐτῶν 「彼らのうちで誰が一番大いなるものか〔という論争〕」

Arm: ... t'e o ardewk' mec ic'ē i noc'anē

Goth: ... þata hvarjis þau ize maists wesi

Lk 15,26 ἐπυνθάνετο τί ἂν εἶη ταῦτα 「彼は、あれは何かとたずねた」 (cf. Lk 18,36 ἄν なし)

Arm: harc'anēr t'e zinč'? ic'ē ayn

Goth: frahuh hva wesi þata

アルメニア語では間接疑問文であっても、疑問符が現れていることから理解されるように、統辞的には半ば直接疑問文のような扱いがなされており、従って時制としては現在が用いられているのに対して、ゴート語の希求法過去はいわゆる *consecutio temporum* の現象で、主節の過去に合わせた間接疑問文中の時制として機能している。

2.3. ゴート語における nibai, niba による条件

上記に見てきた条件では通常の否定は「もし…でなければ」のように条件節内の動作・出来事が否定されるのに対して、ゴート語には条件そのものを否定して「もし…という条件がなければ」「…でない場合に限り」または「…という条件の場合は除いて」という除外・排他的な意味を示す nibai/niba が存在する。これらの語はいわゆる除外節(exceptional clause; Gk. εἰ μή)にも用いられ、帰結節の内容を否定するための「唯一の条件」を提示する⁽¹⁰⁾。nibai/niba には規則的に直説法が後続する。アルメニア語にはこうした機能をになう特別の語はなく、通常は et'e oč' + 接続法によって対応している :

Mk 3,27 οὐ δύναται οὐδεὶς εἰς τὴν οἰκίαν τοῦ ἰσχυροῦ εἰσελθὼν τὰ σκεύη αὐτοῦ διαρπάσαι, **ἐὰν μὴ** πρῶτον τὸν ἰσχυρὸν δήσῃ 「強い者をまず縛り上げずには、誰も彼の家に入ってその家財道具を略奪することはできない」

Arm: oč' ok' karē zkarasi hzawri mteal i town nora awar harkanel, **et'e oč'** nax zhzawrn kapic'ē

Goth: ni manna mag kasa swinþis galeiþands in gard is wilwan, **niba** faurþis þana swinþan gabindip

Jn 6,44 οὐδεὶς δύναται ἐλθεῖν πρὸς με **ἐὰν μὴ** ὁ πατὴρ ὁ πέμψας με ἐκλύσῃ αὐτόν 「私を派遣した父が引き寄せるのでなければ、誰も私のところに来ることはできない」

Arm: oč' ok' karē gal ar is **et'e oč'** hayrn or zis arak'eac' igesc'ē zna

Goth: ni manna mag qiman at mis, **nibai** atta saei sandida mik atþinsip ina

しかし一方において、ギリシア語で ἐκτός εἰ と εἰ μή の混交である ἐκτός εἰ μή が nibai により訳されていること、また他方において、アルメニア語でも除外節を導入する bayc' et'e + 接続法がゴート語で nibai が用いられている箇所に見られていることが、nibai が除外的な条件であることを間接的に支持する証拠となっている。次の例で動詞はギリシア語とアルメニア語で直説法アオリスト、ゴート語で直説法過去と規則的である⁽¹¹⁾ :

1Cor 15,2 δι' οὗ καὶ σώζεσθε, τίνι λόγῳ εὐηγγελισάμην ὑμῖν εἰ κατέχετε, ἐκτός εἰ μὴ μή εἰκῆ ἐπιστεύσατε 「もしもあなた方が、私がどんな言葉によってあなた方に福音を告げ知らせたかを堅く保持し、空しく信じたのでない限り、その福音によってあなた方は救われるのだ」

Arm: orov aprec'ēk'n, orov baniw awetaranec'i t'ē ownic'ik', bayc' et'ē i zowr

inč' hawatac'ēk'

Goth: þairh þatei jah ganisip: in hwo saupo wailamerida izwis, skuluþ gamunan, niba sware galaubideduþ

次の例もアルメニア語 bayc' et'e が対応する除外的条件説であるが、ゴート語希求法形 bugjaima は対応箇所 Mk 6,37 に現れるギリシア語接続法形 ἀγοράσωμεν の影響を受けたものか、あるいは前節の bugjaina sis matins (原文は εὐρωσιν ἐπισιτισμόν であるが、これ自身が Mt 14,15 ἀγοράσωσιν ἑαυτοῖς βρώματα および Mk 6,36 に従った変更とされる) の影響によるものかどうかは決定できない。ギリシア語は εἰ+接続法であり、接続詞ではなく動詞形に基づいて第3類条件と判断される：

Lk 9,13 οὐκ εἰσὶν ἡμῖν πλεῖον ἢ ἄρτοι πέντε καὶ ἰχθύες δύο, εἰ μήτι πορευθέντες ἡμεῖς ἀγοράσωμεν εἰς πάντα τὸν λαὸν τοῦτου βρώματα 「私たちが行ってこの民すべてのために食物を買ってくるようなことでもしない限り、私たちのもとは5個のパンと2匹の魚以上のものはない」

Arm: oč' goy mer aweli k'an zhing nkanak ew zerkows jkowns, bayc' et'e ertic'owk' gnesc'owk' bawakan žolovrdeand kerakowr

Goth: nist hindar uns maizo fimf hlaibam, jah fiskos twai, niba bau þatei weis gaggandans bugjaima allai þizai manaseidai matins

次の例でゴート語は nibai に直説法(matjip)と希求法(driggkaip)を並列させているが、nibai の直後に置かれた直説法が規則的な形式に合致しているとみなされる⁽¹²⁾：

Jn 6,53 ἐὰν μὴ φάγητε τὴν σάρκα τοῦ υἱοῦ τοῦ ἀνθρώπου καὶ πίητε αὐτοῦ τὸ αἷμα, οὐκ ἔχετε ζωὴν ἐν ἑαυτοῖς 「あなた方が人の子の肉を食べ、その血を飲まないなら、あなた方は自分のうちに命を持っていない」

Arm: et'e oč' kerijik' zmarmin ordwoy mardoy ew arbjik' zariwn nora, oč' ownik' keansn yanjins

Goth: nibai matjip leuk þis sunaus mans jah driggkaip is bloþ, ni habaiþ libain in izwis silbam

Streitberg (1981: 93)によれば、niba は何度か希求法現在または過去と結合することがあり、その場合には上記のような意味ではなく jabai ni を意味している：

Jn 10,37-8 εἰ οὐ ποιῶ τὰ ἔργα τοῦ πατρὸς μου, μὴ πιστεύετε μοι· (38) εἰ δὲ ποιῶ,

κὰν ἐμοὶ μὴ πιστεύητε, τοῖς ἔργοις πιστεύετε 「私が父の業を行っていないなら、私の言うことを信じるのをやめよ。しかし行っているなら、たとえ私の言うことを信じなくても、業を信じよ」

Arm: et'e oč' gorcem zgorcs hawr imoy, mi hawatayk' inj. (38) apa t'e gorcem, t'e ew inj oč' hawatayk', sakayn gorcoč'n hawatayč'ek'

Goth: niba taujau waurstwa attins meinis, ni galaubeiþ mis; (38) iþ jabai taujau, niba mis galaubjaib, þaim waurstwam galaubjaib

ギリシア語直説法現在＝アルメニア語直説法現在＝ゴート語希求法現在という動詞形の対応から見て、この用法は第1類条件に属するものと考えられる。

Jn 14,2 ἐν τῇ οἰκίᾳ τοῦ πατρὸς μου μανὰι πολλὰί εἰσιν· εἰ δὲ μὴ, εἶπον ἂν ὑμῖν ὅτι πορεύομαι ἐτοιμάσαι τόπον ὑμῖν; 「私の父の家には住处が多い。仮にそうでなかったとすれば、あなた方のために場所を準備しに行こうとしているなどとあなた方に言ったりしただろうか」

Arm: i tan hawr imoy awt'evank' bazowm en. apa t'e oč', asac'eal ēr im jez t'e ert'am patrastem jez teli

Goth: in garda attins meinis salīþwos managos sind; aþþan niba weseina, aibþau qeþjau du izwis: gagga manwjan stad izwis

この箇所では、アルメニア語にはギリシア語と同じく条件節に動詞形は現れていないが、ゴート語では希求法過去 weseina が補われており、加えて現実に反する仮定の帰結節を導く aibþau に希求法過去が後続していることから、この条件が第2条件に属していることは明らかである。このように niba+希求法は、除外的な条件('unless, außer wenn')にもつばら用いられる niba+直説法とは明確に境界を画している。

2.4. ギリシア語内容節 iva+接続法に対するアルメニア語 et'e 構文

ギリシア語には説明的な不定詞に代えて iva+接続法によって内容節を導入する重要な構文が存在する(Blass/Debrunner/Rehkopf 1990: 324)。アルメニア語はこの構文に対して原則として zi+接続法を用いるが、時おり et'e+接続法を用いた例も見られる：

Mt 18,14 οὐκ ἔστιν θέλημα ἔμπροσθεν τοῦ πατρὸς ὑμῶν τοῦ ἐν οὐρανοῖς iva ἀπόληται ἐν τῶν μικρῶν τούτων 「これらの小さい者たちのうちの一人でも滅ぶことは、天にいるあなたたちの父の意志ではない」

Arm: oč' en kamk' aŕaji hawr imoy or yerkinsn ē, et'e koric'ē mi i p'ok'rkanc' yaysc'anē

Jn 15,13 「人がその友人たちのために命を棄てること、これよりも大いなる愛は誰も持つことがない」

Arm: mec ewš k'an zays sēr oč' ok' owni, et'e zanjn iwr dic'ē i veray barekamac' iwroc'

後者の et'e に対して Künzle (1984: 197) は「条件的か？」と注記している。前節 αὐτὴ ἐστὶν ἡ ἐντολὴ ἡ ἐμὴ, ἵνα ἀγαπάτε ἀλλήλους καθὼς ἠγάπησα ὑμᾶς = ays ē patowēr im. zi siresjik zmimeans orpēs ew es zjez sirec'i 「私があなたたちを愛したように、あなたたちが互いに愛し合うように。これが私の命令である」との平行性に鑑みて、語順がともに原文に忠実であること、そしてともに ays という指示詞が後方照応的に機能しているにもかかわらず、zi ではなく et'e をあえて用いたのにはこの構文に幾分か条件的な意味合いを付与する意図が翻訳者にまったくなかったとは言い切れないのではないだろうか（さらに Mt 5,29; 8,8; Jn 1,27 も参照）。

3. 非明示的な条件

以上においては条件節に接続詞を用いる明示的な表現を扱ったが、条件的な解釈は非明示的表現によるものにも可能であり、そのような表現として、状況を表す副詞的な分詞、実詞的な分詞、関係節によるものが主に考えられる⁽¹³⁾。以下では、その例を少し見てみよう。

a) 状況を表す分詞

Lk 9,25 τί γὰρ ὠφελεῖται ἄνθρωπος κερδήσας τὸν κόσμον ὅλον ἑαυτὸν δὲ ἀπολέσας ἢ ζημιωθεῖς; 「全世界を儲けても、自分自身を滅ぼしたり、〔自分自身が〕害を蒙ったりしては、人はなんの益を受けるのか」

Arm: zinč' awgowt ē mardoy et'e z-ašxarh šahesc'i, ew zanjn iwr korowsc'ē kam towžesc'i

アルメニア語は接続詞 et'e+接続法アオリストを用いて、条件の意味を明示している。しかし、一般的には原文に倣って分詞をそのまま用いるのが通例である：

He 2,3 πὼς ἡμεῖς ἐκφευξόμεθα τηλικαύτης ἀμελήσαντες σωτηρίας; 「私たちがこれほどの大いなる救いをおろそかにするなら、どうして〔報いを〕逃れることができるのか」

Arm: mek' ziard? apresc'owk' helgac'ealk' yaynpisi p'rkowt'enē

他方、アルメニア語では原文の分詞を関係節で訳すことも多く、その場合でも定形動詞は接続法の形をとって条件的な意味を伝えている。条件の意味合いを表すのに接続法を用いるのはアルメニア語ではごく普通の現象である。アルメニア語で接続法は出来事の生起可能性を表現する常套手段だからである。

Lk 15,4 τίς ἀνθρώπος ἐξ ὑμῶν ἔχων ἑκατὸν πρόβατα καὶ ἀπολέσας ἐξ αὐτῶν ἓν οὐ καταλείπει τὰ ἐνενήκοντα ἐννέα ἐν τῇ ἐρήμῳ καὶ πορεύεται ἐπὶ τὸ ἀπολωλὸς ἕως εὕρη αὐτό; 「あなたたちのうちの誰かが 100 匹の羊を持っていて、そのうちの 1 匹を失ってしまったとしたら、99 匹を荒野に放っておいて、失われたその 1 匹を見つけるまで、それを求めて歩かないだろうか」(ゴート語はそれぞれに分詞 *aigands, fraliusands*)

Arm: o? ok' ic'ē i jēnj mard oroy ic'ē hariwr oč'xar ew korowsanic'ē mi i noc'a, oč' t'olowc'ow zinnsozn ew zinn y'anapati ew ert'aycē zhet korowseloy n minč'ew gtanic'ē? zna

1Tm 4,4 οὐδὲν ἀπόβλητον μετὰ εὐχαριστίας λαμβανόμενον 「感謝をもって受け取るならば、捨て去るべきものは何一つない」

Arm: č'ik' inč' xotan, manawand or gohowt'eamb əndownic'in

新約ギリシア語においてこの用法は時に手段を表す分詞と重なることがあり、アルメニア語訳では名詞具格形 *hawatovk'* がこれに応じている：

Mt 21,22 πάντα ὅσα ἂν αἰτήσητε ἐν τῇ προσευχῇ πιστεύοντες λήψεσθε 「祈りの中で信じて求める一切のものを、あなたたちは受け取るであろう」

Arm: zamenayn inč' zor ew xndric'ēk' yaławt's hawatovk', aṛnowc'owk'

b) 実詞的分詞

「条件を表す実詞的分詞」という独立した統辞法的範疇は存在しないが、分詞を用いて条件の概念を含意することはできる。これはしばしば定式 *ó*+分詞(+分詞)+直説法未来に従う：

Mt 5,6 μακάριοι οἱ πεινῶντες καὶ διψῶντες τὴν δικαιοσύνην, ὅτι αὐτοὶ χορτασθήσονται 「幸いだ、義に飢え渴く者たち、その彼らこそ、満ち足りるようにされるであろう」

Arm: erani or k'alč'eal ew carawi ic'en ardarowt'ean, zi nok'a yagesc'in

これは明示的な条件として「あなたたちは、義に飢え渴くなら、幸いだ」と言い換えることができる。

Mk 16,16 ὁ πιστεύσας καὶ βαπτισθεὶς σωθήσεται, ὁ δὲ ἀπιστήσας κατακριθήσεται
「信じて洗礼を受けるもの者は救われるであろう。信じない者は断罪されるであ
ろう」

Arm: or hawatasc'ē ew mkrtic'i kec'ē, or oc'-n hawatasc'ē datapartesc'i

これも同様に、「あなたは、信じて洗礼を受けるなら、救われるであろう」と言い換えることができる。注意すべきことは、条件節の 2 つの条件が帰結節と同一の関係を必ずしも担ってはいないということである。ここではその 2 つの条件の一方が原因、他方が根拠ないし証拠かもしれない。もしそうであるとすれば、「あなたが信じるならば」というのは原因であり、帰結節における「救われること」の実現は「信じること」に依存しており、「そしてあなたが洗礼を受けるならば」は「信じること」の証拠であって、帰結節の事態の実現はこれに依存しない。従って、後続する一文「信じない者は断罪されるであろう」。アルメニア語は条件節におけるこの違いを、前者およびその帰結節に対しては同じく接続法アオリストにより、後者に対しては接続法現在により差異化していると考えられる。

c) 関係節

ギリシア語において条件的な関係文は通常は、具体的な現実について断言をするのではなく、むしろ一般的な確言あるいは仮定をするものであり、従って本来の条件節の ἐάν に対応して不定的な関係節 ὅς(ὅστις) ἄν が原則として現れるとされる (Blass/Debrunner/Rekopf 1990: 308f.)。次の例ではアルメニア語は接続法現在、ゴート語は直說法現在を用いている⁽¹⁴⁾：

Lk 8,18 ὅς ἂν γὰρ ἔχη, δοθήσεται αὐτῷ 「持っているであろう者には与えられるであ
ろう」

Arm: oyr gowc'ē, tac'i nma

Goth: saei habaiþ, gibada imma

以下の 2 つの例では、アルメニア語は前者に et'e, ゴート語では両箇所でも jabai という明示的な条件の接続詞を用いていることから、ギリシア語の関係節構文が条件的に捉えられていることが分かる：

Mt 5,39 ὅστις σε ῥαπίζει εἰς τὴν δεξιὰν σιαγόνα σου, στρέψον αὐτῷ καὶ τὴν ἄλλην
「あなたの右の頬に平手打ちを加える者には、もう一方の頬をも向けてやれ」

Arm: et'e ok' acic'e aptak yaj cnawt k'o, darjo nma ew zmiwsn

Goth: jabai hvas þuk stautai bi taihswon þeina kinnu, wandeī imma jah þo
anþara

Mt 5,41 ὅστις σε ἀγγαρεύσει μίλιον ἔν, ὕπαγε μετ' αὐτοῦ δύο 「あなたを徴用して
1 ミリオン行かせようとする者とは、一緒に 2 ミリオン行け」

Arm: or taraparhak varic'e zk'ez mħion mi, ert' ənd nma erkows

Goth: jabai hvas þuk ananaubjai rasta aina, gaggais miþ imma twos

4. おわりに

新約ギリシア語の意味的範疇に従って分類された条件文のそれぞれに関して、特に叙法の分布の観点から、アルメニア語とゴート語がどのような振舞いを示しているかという問題を考察した。総体的にアルメニア語はギリシア語の叙法の分布に準じていること、そして第 2 類条件ではアルメニア語がギリシア語と顕著な類似性を示していることを明らかにした。しかし、過去の非現実的な仮定の場合、ギリシア語の直説法アオリストに対して、アルメニア語では特に条件節でアオリスト分詞+未完了過去繫辞の迂言的形式を用いるという現象はアルメニア語に固有の特徴である。第 1 類および第 3 類条件における叙法の用法に関しては、アルメニア語は概ね、希求法の衰退に伴い接続法の適用範囲を大幅に拡大している新約ギリシア語と軌を一にするが、独立した希求法が存在しないだけ、アルメニア語は接続法の適用範囲をギリシア語よりもさらに拡張していることを示した。

アルメニア語のギリシア語的な振舞いに比して、ゴート語は固有の特徴を多く持っていることが明らかになった。アルメニア語と同様に、ゴート語も希求法の適用範囲の拡大という形で叙法の数を一つ減らしてはいるが、アルメニア語と決定的に異なる点は、希求法過去が第 2 類条件の条件節と帰結節に専用の叙法としてほぼ特化されたことであろう。これにより第 2 類条件で非明示的な条件文が可能になったこと、さらに nibai/niba による除外的な条件節の提示、等位された条件文における叙法の交替などが、アルメニア語には見られないゴート語独自の統辞法的特徴であることを論じた。

注

(1) jabai は通常、関係詞語幹 yo- と関連づけられるが、Brugmann(1904: 669)はこれを疑問視して、小辞 ja との関係を示唆している。前倚辞的な -ba, -bai は確言の小辞

であり (Av. *bā*, Lith. *bà*, Arm. *ba(y)* 「本当に」; *-ba* : *-bai* = *ja* : *jai*)、*jabai* が本来は強調された **bai* に過ぎなかったとすれば、Jn 11,25 における *-ba* の用法はその本来の機能を示す重要な証拠ということになり、彼の示唆は再考に値しよう。

- (2) ゴート語が条件節を導く接続詞として *jabai* ではなく、しばしば *pande* を用いているのはこの条件が理由を表す「…だから」と隣接していることを裏付けている。Cf. Mt 6,30 *εἰ τὸν χόρτον τοῦ ἀγροῦ ... ὁ θεὸς οὕτως ἀμφιέννυσιν, οὐ πολλῶ μᾶλλον ὑμᾶς*; 「野の草を神はこのように装ってくださるのであれば、あなた方をなお一層装ってくださらないはずがろうか」 = *pande pata hawi haipjos ... guḅ swa wasjib, hvaiwa mais izwis?* また Jn 13,17 参照。
- (3) 未来は意味論的には直説法よりもむしろ接続法に近いという理由で、Porter (1992: 264-267) は *εἰ* + 未来による条件節 (future most vivid) を独立した範疇として扱っている。しかし *εἰ* + 直説法未来と *ἐάν* + 接続法現在が区別されるのは、前者が論理的推論しか表さないのに対して、後者は実現可能であることを示唆する限りにおいてのみである (Blass/Debrunner/Rehkopf 1990: 303)。
- (4) 第 2 類条件の条件節には過去完了が 5 回現れる (Mt 24,43; Lk 12,39; Jn 4,10; 8,19; Ac 26,32)。このうち 4 回は *οἶδα* の過去完了 (*ἴδεν*) であり、単純な過去時制として機能している。
- (5) ギリシア語においては第 1 類条件が第 2 類条件の領域に移行している例がわずかに見られるが、アルメニア語では後者の解釈をして、*et'e* + 未完了過去で訳している： Lk 17,2 *λυσιτελεῖ αὐτῷ εἰ λίθος μυλικὸς περικεῖται περὶ τὸν τράχηλον αὐτοῦ καὶ ἔρριπται εἰς τὴν θάλασσαν ...* = *law ēr nma et'e vēm erkanak'ar kaxēr zparanoc'ē nora ew ankanēr i cov ...* 「彼にとっては、仮にその首に碾き臼の石をつけられて海に放り込まれた方がましであったろう」。
- (6) 古典ラテン語では、現在の非現実性に対しては接続法現在が次第に接続法未完了過去によって、過去の非現実性に対しては接続法未完了過去が次第に接続法過去完了によって駆逐されたが、同様にゴート語でも現在の非現実性に対しては希求法過去がもっぱら用いられることになった (Wackernagel 1926:255)。ラテン語とのほぼ完全な一致については Hirt (1934: 153f.) が対応するウルガタ訳を掲げて言及している。例えば Jn 8,42 *si deus pater vester esset, diligeretis me*; Jn 9,33 *nisi esset hic a deo, non poterat facere quidquam*; Jn 9,41 *si caeci essetis, non haberetis peccatum*。
- (7) Streitberg (1919: 66) はギリシア語原文を *εἰ ἐγνώκειτέ με, καὶ τὸν πατέρα μου ἐγνώκειτε ἄν* と復元している。その動詞形は未完了過去の意味での過去完了である。cf. Mt 11,21; Lk 10,13; 19,42; Jn 8,19, 39; 9,41; 11,21,32; 14,7; 15,24; 18,36; 1Cor 12,19。

- (8) Streitberg(1981: 91)が jabai+直説法により標示される現実的な条件として挙げた例はギリシア語原文ではほとんどが ἐάν による第 3 類条件である(cf. Mt 5,46; 6,14.15.22; Jn 14,15 など)。
- (9) これとは逆にアルメニア語である種の差異化がはかられ、ゴート語では同一化が意識されているような例も見られる : Mk 12,19 Μωϋσῆς ἔγραψεν ἡμῖν ὅτι ἐάν τινος ἀδελφὸς ἀποθάνῃ καὶ καταλίπῃ γυναῖκα καὶ μὴ ἀφῆ τέκνον, ἵνα λάβῃ ὁ ἀδελφὸς αὐτοῦ τὴν γυναῖκα καὶ ἐξαναστήσῃ σπέρμα τῷ ἀδελφῷ αὐτοῦ 「モーセは私たちに〔次のように〕書き残した、もしある人の兄が死に、妻を残したが子を残さなかった場合、その弟がその妻を取り、自分の兄の子孫を残すように、とのことだ」 = Arm: Movsēs greac' mez, et'e owrowk' elbayr meřanic'i ew t'olowc'ow kin ew ordi oc' t'olowc'ow, zi ařc'ē elbayr nora zkinn nora ew yarowsc'ē zawak elbayr iwrowm = Goth: Moses gamelida unsis þatei jabai hvis broþar gadauþnai jah bileiþai qenai jah barne ni bileiþai, ei nimai broþar is þo qen is jah ussatjai barna broþr seinamma. ギリシア語では ἐάν 条件節も ἵνα 節も動詞形はすべて接続法アオリストである。これに対しアルメニア語では et'e 節に接続法現在、zi 節に接続法アオリスト、ゴート語ではすべて希求法現在を示している。ゴート語では jabai 節の動詞は直説法も希求法も取り得るから、その希求法形を ei 節の希求法形に合わせたという可能性は積極的に支持されないが、アルメニア語では et'e 節の動詞は接続法アオリストが可能であるにもかかわらず、勧請的な zi 節に通常要求される接続法アオリストとは異なる動詞形を採用した可能性が高い。
- (10) 例えば Jn 10,10 þiubs ni qimib, nibai ei stilai jah ufsneiþai jah fraqistjai = ὁ κλέπτης οὐκ ἔρχεται εἰ μὴ ἵνα κλέψῃ καὶ θύσῃ καὶ ἀπολέσῃ 「盗人が来るのは盗み、屠り、滅ぼすためにほかならない」は『欽定英訳聖書』(King James Verson)で “The thief cometh not, but for to steal, and to kill, and to destroy” と訳されていることから明らかなように、nibai は除外節を形成する要素でもある。
- (11) アルメニア語のみで動詞は接続法形 1Cor 14,5 μείζων δὲ ὁ προφητεύων ἢ ὁ λαλῶν γλώσσαις ἐκτὸς εἰ μὴ διερμηνεύῃ, ἵνα ἡ ἐκκλησία οἰκοδομῆν λάβῃ = law ē or margarēanayn, k'an zayn or i lezowsn xōsic'i, bayc' et'ē t'argmanesc'ē, zi ekelec'in šinowt'iwn ařnowc'ow 「教会が建築を享受するためには、異言によって語る者がそれを解釈しない限り、予言をする者の方が異言によって語る者よりも大いなる者なのである」。また、動詞は欠けているが、1Tm 5,19 κατὰ πρεσβυτέρου κατηγορίαν μὴ παραδέχου, ἐκτὸς εἰ μὴ ἐπὶ δύο ἢ τριῶν μαρτύρων = zeric'owē č'araxōsowt'iwn mi əndownic'is, bayc' et'ē erkowk' ew eriwk' vkayiwk' = bi praiwbtairein wroh ni andnimais, niba in andwairþja twaddje aiþþau þrije weitwode 「長老に対する訴えは、2人か3人の証人によって〔立件されて〕いなか

れば、あなたは受理してはならない」。

- (12) 叙法の交替に関して Bernhardt(1875: 2f.)は “der conjunctiv bezeichnet die entferntere, von der erfüllung der ersten bedingung abhängige handlung” と述べて、関係節(Mt 10,38; Lk 14,27; 1Cor 11,27)、条件節(Jn 6,53)、主節(Lk 17,8)を参照している。
- (13) 稀に直接疑問文が条件的な意味で用いられることがある : Mt 26,15 τί θέλετέ μοι δοῦναι, κἀγὼ ὑμῖν παραδώσω αὐτόν; 「あなたたちは私に何を与えてくれるか (=あなたたちが私に何かを与えてくれるなら)。この私はあなたたちに彼を引き渡そうと思うのだ」。また命令法も : Jn 2,19 λύσατε τὸν ναὸν τοῦτον καὶ ἐν τρισὶν ἡμέραις ἐγερῶ αὐτόν 「この神殿を壊してみろ。3日のうちに起こしてみせよう」。
- (14) 原文が定的な仮定あるいは先行する陳述から派生する事実を表現する直説法であっても、アルメニア語で接続法現在が用いられることがある : Mk 4,25 ὅς γὰρ ἔχει, δοθήσεται αὐτῷ 「持っているであろう者には与えられるであろう」 = Arm: or ok' ownic'i, tac'i nma = Goth: þishvammeh saei habaiþ gibada imma. しかし、等価的な条件で直説法現在が直訳されることもある : Lk 9,50 ὅς γὰρ οὐκ ἔστιν καθ' ὑμῶν, ὑπὲρ ὑμῶν ἐστιν 「あなたたちに逆らわない者はあなたたちに味方する者だから」 = or oç'n ē jer t'snami, i jer kołmn ē = saei nist wiþra izwis, faur izwis ist.

参考文献

- Bernhardt, Ernst. 1875. *Vulfila oder die gotische Bibel*. Mit dem entsprechenden griechischen Text und mit kritischen und erklärenden Commentar, nebst dem Kalender, der Skeireins und den gotischen Urkunden. Halle: Verlag der Buchhandlung des Waisenhauses.
- Blass, Friedrich and Albert Debrunner. 1990. *Grammatik des neutestamentlichen Griechisch*. Bearbeitet von Friedrich Rehkopf. 17. Auflage. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.
- Brugmann, Karl. 1904. *Kurze vergleichende Grammatik der indogermanischen Sprachen*. Straßburg: Trübner. [Reprinted 1970 by de Gruyter, Berlin.]
- 千種眞一. 1997. 「古アルメニア語統辞法の若干の問題について」『東北大学言語学論集』6, 1-26.
- 千種眞一. 2001. 『古典アルメニア語文法』大学書林.
- Hirt, Hermann. 1934. *Handbuch des Urgermanischen*. Teil III: *Abriss der Syntax*.

Heidelberg: Carl Winters Universitätsbuchhandlung.

Jensen, Hans. 1959. *Altarmenische Grammatik*. Heidelberg: Carl Winter.

Künzle, Beda. 1984. *Das altarmenische Evangelium/L'Évangile arménien ancien*.
Teil I/I^{ère} partie: *Edition*, Teil II/II^e partie: *Lexikon/Lexique* (Europäische
Hochschulschriften, Reihe XXI. *Linguistik und Indogermanistik*, Band 33.)
Bern-Frankfurt am Main-New York: Peter Lang.

Meillet, Antoine. 1910-11. "Recherches sur la syntaxe comparée de l'arménien, IV:
Emploi des formes personnelles des verbes." *MSL* 16, 92-131. [Reprinted in
Meillet (1962: 83-122)]

Meillet, Antoine. 1962. *Études de Linguistique et de Philologie Arméniennes*, I.
Lisboa: Imprensa Nacional.

Porter, Stanley E. 1992. *Idioms of the Greek New Testament*. Sheffield: JSOT
Press.

Streitberg, Wilhelm, ed. 1919. *Die gotische Bibel*.² sechste, unveränderte Auflage.
1971. Heidelberg: Carl Winter.

Streitberg, Wilhelm. 1981. *Gotische Syntax*, herausgegeben von Hugo Stopp.
Heidelberg: Carl Winter.

Wackernagel, Jacob. 1926. *Vorlesungen über Syntax*. Mit besonderer
Berücksichtigung von Griechisch, Lateinisch und Deutsch. Erste Reihe.
Zweite Auflage. Basel: Birkhäuser.

(東北大学大学院文学研究科 教授)